

ため池みらいプロジェクト

柴崎浩平（環境デザイン系）

キーワード：農村，ため池，草刈り，里山，山採り，コミュニティビジネス

1. はじめに

本プロジェクトでは、ため池のある暮らしのみらいを創造していくことを目的とし、水や緑に関する資源（ため池や里山，農業・農地，それらを管理する人材など）の管理・活用に向けた地域連携のあり方を探求している。連携先としては、著者が代表理事を務める「（一社）ため池みらい研究所」ならびに同研究所に関わるプレイヤーとなる^{注1}。

本プロジェクトは、農山村で活動を展開していききた学生にとってのプラットフォーム機能を持つ。また、具体のプロジェクトに強い意向を示す学生が複数いる場合は、プロジェクト推進能力を養うためにも組織化（学生団体化）を促している。本年度は、2つの学生団体化を促してきた。1つは、加古川市の広尾東集落にて、集落と学生を結ぶ活動をおこなう「広尾東ファンクラブ」、2つは後述する里山づくりに関連する「山採りプロジェクト」である。

活動内容として大きくは、「研究・実践活動」と「交流活動」をおこなっている。「研究・実践活動」としては、「暮らしとつながる里山づくり」と「草刈りグループの創造」がある。「交流活動」としては、フィールドに赴き、地域のイベントへの参加やフィールドワーク、学内の交流活動などがある。以下、順番に説明を加えていく。

なお、2024年度のプロジェクトメンバーは3回生6名、2回生11名、1回生4名の計21名である。

2. 研究・実践活動

2.1 暮らしとつながる里山づくり

2.1.1 背景と目的

かつて里山は農村でのライフスタイルに欠かさないものであった。しかし今日の暮らしにおいて、里山は利用されなくなり、結果として多くの里山は荒廃している。そこで、里山資源を現代のライフスタイルにあった形で活用し、里山の荒廃を防ぐ取り組みを展開している。

具体的には、山採り（里山に自生している樹木・



写真1 山採りおよび植栽の様子

幼木・下草を掘り取り、庭などの植栽として活用すること）を促す仕組みづくりをおこなっている。連携先は、リビングソイル研究所（代表 西山氏）および加古川市志方町広尾東の住民である。西山氏は、土壌の専門家であり、自生種を生かした植栽空間づくりをおこなっており、学生への技術的な指導を担っている。広尾東の住民は、実践フィールドの提供を担っている。

2.1.2 活動の内容と今後の課題

主な活動としては、里山での樹木・幼木・下草の山採りおよびそれらの試験的な販売、里山の植物の種の採取・育苗、山採り植物の植栽や庭づくりなどをおこなった（写真1）。

本プロジェクトの大きな課題は、山採りコミュニティの創造にある。里山には様々な植物が自生しているが、全ての植物が山採り・植栽に適している訳ではない。活着のしづらさや販売価格は樹種によって様々である。また、同じ樹種であっても、大きさや形で販売価格も異なる。そのため、山採りに適した植物を見分け、その掘り出し方・活着のさせ方や販売に関する知識・技術を習得する必要がある。活動を始めた当初は、樹種の見極めや、掘る・植えるといった作業もままならなかったが、本年度では学生だけでもある程度は実施できるようになるなど、活動が進捗している。

先述した通り、本プロジェクトは学生のプロジェクト推進能力を養うためにも組織化（学生団体化）を促している。今後は、学生団体へのサポートという形で、山採りスキルの向上、山採り植物の販売実績や植栽・庭づくりの経験の蓄積、里山を活用したイベントの企画力・実践力の蓄積などをサポートしていきたい。



写真2 播磨畦師の活動の様子

2.2 草刈りグループの創造

2.2.1 背景と目的

草刈りは、農村の資源を管理していくうえでの基礎的かつ必要不可欠な作業である。草刈りの実施主体は、畦やため池の堤体、共有地などの実施場所によって異なるが、集落コミュニティで実施されるケースが多い。しかし、少子高齢化や集落機能の低下にともない、地域の草刈を継続して実施していくことが困難になっている。そこで、多様な立場の人々が参加する新しい草刈りグループが複数生まれやすい仕組みづくりをおこなっている。

2.2.2 活動の内容と今後の課題

これまでに、都市部の住民が有償で草刈りサービスを提供するグループ（名称：播磨畦師）の創造などに取り組んできた^{注2)}。今年度は、播磨畦師の活動に学生が参加し、草刈りをおこなった（写真2）。

今後も、単に草を刈るだけでなく、草かりを通した学びや気づきが得られる仕組みづくりを実施していく予定である。

3. 交流活動

大きくは、「ため池みらい交流会」および「地域での交流活動」をおこなった。「ため池みらい交流会」は、ため池みらい研究所が主催する交流会であり、学生や研究員が本年度におこなった活動を報告する場となっている（JA 兵庫南神野支店にて2月28日実施）。参加者は71名であった（写真4）。学生は、本交流会で発表するだけでなく、企画・実施サポートをおこなった。

「地域での交流活動」としては、特別フィールドワーク「ため池アクション」の実践フィールドにおいて、授業期間終了後も含め継続的な交流活動をおこなった。具体的には、数年ぶりの開催となる夏祭りの企画・運営サポート（出店の手伝いなど）、コスモス祭りの運営サポート（会場設営やサツマイモ



写真4 ため池みらい交流会の様子



写真5 交流活動の様子

掘り、商品として出品する枝豆の選定・販売など）、地域でおこなわれるイベントのサポートや、農業やため池、農地、水利施設などを管理していくうえでのリアルな課題を当事者から聞くフィールドワークなどをおこなった（写真5）。これらの交流活動をおこなっていくなかで、学生と地域住民の関係性が深まっており、新たに学生プロジェクトを立ち上げる動きもみられる。なかでも、広尾東においては活発に活動が展開されており、関わる人数も多くなってきたことから、集落と学生を結ぶ活動をおこなう「広尾東ファンクラブ」という学生団体の発足に至った。

5. 今後の展望

各研究・実践活動は始動したばかりであり、課題は多くある。それらの課題を明確化するとともに一つずつ解決していくことが必要である。これらの活動が、学生にとってのコース選択やゼミ選択、さらには卒業論文のテーマ選定、キャリア選択において、有益な経験となるようにしていきたい。

注釈

注1) 「（一社）ため池みらい研究所」については、環境人間学部の情報サイト「かなび」を参照されたい。<https://shse-maga.com/study/913>

注2) 「播磨畦師」については、2022年度のエコ・ヒューマン地域連携センター活動・研究報告集を参照されたい。